

令和7年度学校評価表

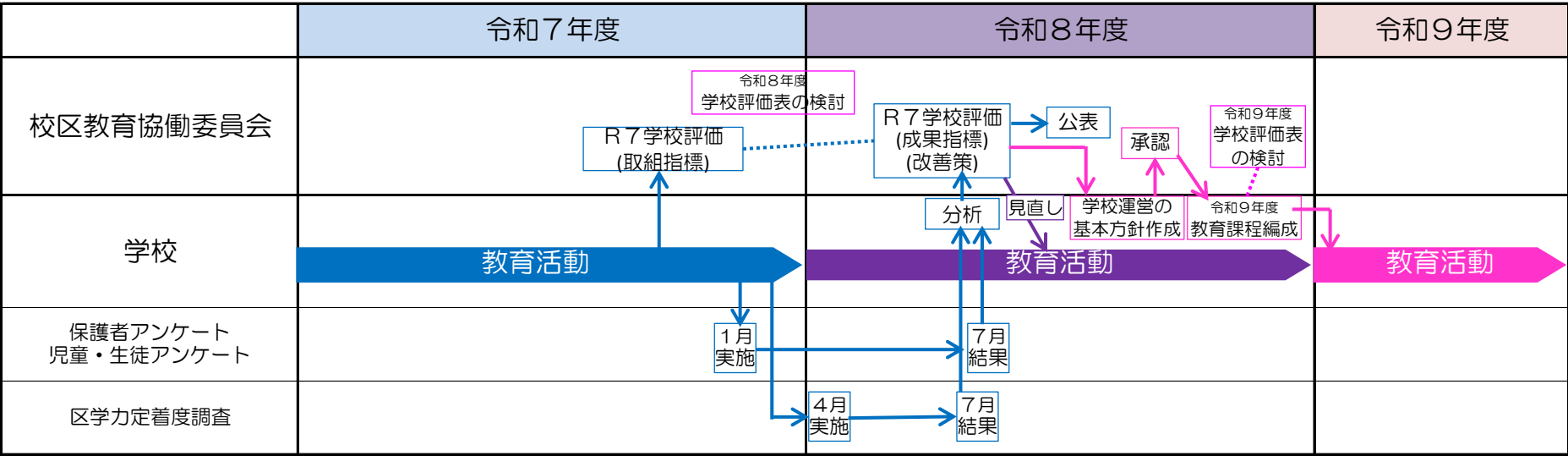
品川区立伊藤小学校	校長	齊藤 直彦
伊藤小学校校区教育協働委員会	委員長	鞍馬 裕美

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		・児童の学習状況を把握し、それを基に個に応じた指導を行うなど、児童が「授業の内容がわかる」と実感できるようにする。(基礎学力の定着) ・個別の課題に応じた学習の場を設定する。(個別最適な学習の確立) ・自分の力を自認し、学習によって力の変容を実感させ、学習意欲を高める。(学習意欲の向上) ・市民科一貫プランの中で、探究学習を展開し、児童が主体的に課題を見付け、解決策を探る力を育成する。(思考力・判断力・表現力の育成)		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では、全問題において目標値を概ね上回る。	対象学年・教科のうち、2学年が目標値を下回ったが、残りの学年はすべて上回っていた。	B	・各教科において、学習内容の定着のために、既習事項の内容を教員が把握したうえで、児童の学習の積み重ねを大切にする。 ・算数科では、3年生からの習熟度別少人数学習に加え、低学年での少人数指導を展開し、特に基礎・基本の定着を図るとともに、算数科の校内研究を進める。 ・未来塾の指導者と担任との連携を強化し、個別支援を充実させる。 ・デジタル機器のさらなる活用方法についての情報共有を進めていく。 ・落ち着いた学習環境を確立するために、生活指導や特別支援教育との連携を強化する。
	各種学力調査・単元テスト・学習状況を分析し、課題と評価を明確にして、習熟度に応じた指導を行う。	学力向上部を中心に、各学年・各教科の課題を分析し、教員全体で共有した。算数に関しては、低学年でも区の講師を活用して、少人数指導にあたり、学習のフォローができた。	A	
	学習規律の徹底と基礎的基本的な知識の習得ができる指導を行う。	学習規律に関しては、教員間で「伊藤小学校のきまり」を更に見直し、校内で共通した指導を行うなど、統一性が図ることができた。	A	
	思考力・判断力・表現力等を育成するためにICT機器の効果的な活用を推進する。	ICT主任を中心に、タブレットや電子黒板を効果的に活用し、思考力等を高める学習の展開ができている。教員間のOJTも有効であった。	A	
②	区の学力定着度調査i-checkでは、「好きな教科や授業がある」の割合が全学年95%以上にする。	学校全体では、96.2%と目標値を超えたが、学年別にみると3年生が93.2%とわずかに目標に届かなかった。	B	・学習に自信がもてない児童に対し、スモールステップで理解の定着を図る。 ・課題解決型の学習を多く取り入れることで、自分の興味・関心にあった学びの場を児童に提供する。 ・本校の探究学習の在り方をさらに検討し、子どもたちの「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていく。
	子どもの発想や「なぜ？」を大切にした授業展開と体験的な活動を効果的に取り入れる。	校外学習やゲストティーチャーを招待するなどの体験的な活動を積極的に取り入れ、児童が主体的に学習に臨めた。また、自校の指導教諭を積極的に活用し、若手教員の授業力向上を図った。	A	
	自分の力を自認し、「できた。できるようになった。分かった。」という実感をさせて、学習意欲を高める。	多くの授業で、学習のまとめや振り返りを取り入れている。また、小テストなどを実施して、学習の理解度を自己認知できるようにしている。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		・市民科を中心に心の教育に焦点をあてた授業の充実を目指す。(自尊感情の育成) ・教員と児童、児童同士の望ましい信頼関係を育成し、認め合う学級集団を作っていく。(共感的人間関係の確立) ・共感的人間関係を作っていくために、市民科を中心として自治的活動の場を多く取り入れていく。(自治的活動の工夫)		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	規範意識や思いやりなど、社会性に関する「i-Check」での肯定的な評価の全国平均を上回る。	肯定的な評価は、全学年ともに全国平均を上回った。特に、学級の規範意識は5ポイントも上回った。	A	・友達の意見を聞いて新しいことに気づいたり、深められたりすることで学ぶ楽しさを味わうことができる児童の育成を引き続き目指す。
	①学級での話し合い活動を多く取り入れ、相手の意見を受け入れたり、自分の考えを主張したりする良さを味わわせる。	市民科における学級会や教科指導で、意図的に話し合う活動を多く取り入れた。学習経験を通して、自分の考えを伝え合うことの良さを味わせた。	B	・市民科を中心として学習したことを校外でも実践できるよう、家庭や地域との連携を図る。特に、望ましい挨拶ができる児童を育てるための取組方法を模索する。
	②校外学習、地域行事で場に応じた行動がとれるよう、事前指導と事後の振り返りを徹底する。	発達段階に応じた校外活動を行い、その場に応じた行動の大切さを学んだ。そのための事前指導・事後指導を必ず行った。	A	・クラブや委員会などの自治活動内容を紹介するなど、自己表現し、認められる機会を作ること、充実感や充足感につなげる。
	③市民科の授業を計画的に実施し、挨拶や礼儀、マナーを身に付けさせる。	市民科で学んだ内容を、必ず日常生活と結びつけ、実践を通して子どもたちに身に付けさせた。挨拶に関しては概ね良好である。登下校時に地域の方々にも挨拶をさせたい。	B	・登校する児童や、廊下ですれ違う児童に対して積極的に教員が挨拶を行う。
	④係や当番、委員会活動などで、目的や他者との関わりを考えさせ、すすんで取り組ませる。	低学年から係や当番の大切さを継続的に経験させている。委員会活動では、児童の発想を大切に、自主的な活動になるよう指導している。	A	・友達の意見を聞いて新しいことに気づいたり、深められたりすることで学ぶ楽しさを味わうことができる児童の育成を引き続き目指す。
	⑤地域清掃などのボランティア活動や幼稚園・保育園との交流活動を、ねらいを明確にして取り組み、地域や人と関わることの良さを理解させる。	伊藤公墓地や養玉院などの地域清掃を通して、ボランティアマインドが育っている。また、近隣の幼稚園保育園との交流を5年生が積極的に行った。	A	・近隣保育園との保幼小連携を企画し、思いやりの心を育む。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立伊藤小学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		・体力調査やスポーツトライアルの結果を以前の自分と比較をしながら、体力向上を実感させる。(変容の実感) ・楽しみながら体を動かす習慣が身に付く場面で設定する。また家庭生活でも体を動かす楽しさを味わえるような取組をする。(体力の向上) ・自ら健康な生活をしようとする知識や行動力を高め、食事や睡眠などの規則正しい生活習慣を身に付ける。(健康への関心)		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	東京都体力テストにおいて、各学年が都の平均を概ね上回る。	東京都の平均と比べると、男子は1.3.4.5年生、女子は3年生が上回った。	B	・ボール投げ(瞬発力・巧緻性)と20mシャトルラン(全身持久力)が本校の課題である。巧緻性については、運動のタイミングをとる調整能力を授業の中で特に育てていく。また、持久力に関しては、家庭にも呼びかけていく。
	スポーツトライアル、ワンミニッツエクササイズを実施し、学年に応じて取り組ませる。	体育朝会や授業を通して、計画的に実施できた。今年度も学校全体で大なわや短なわに取り組んだ。	B	
②	東京都体力テストの意識調査で「運動が好き」「体育が楽しい」と回答する児童が80%以上とする。	「運動が好き」が90.4%、「体育が楽しい」が92.4%と大きく上回った。	A	・「体育が楽しい」と感じられる要因として、「できるようになる」とことと「友達と関わる」ことが考えられる。引き続き、児童が実感できるよう工夫していく。特に、1割いる苦手意識のある児童に対し、丁寧に支援していく。 ・テクニカルアドバイザーのより効果的な活用方法を検討し、体育の年間計画の改善を図る。
	体育部や体力向上委員会が中心となって教材、教具の整備をし、指導資料を作成して担任に配布する。	教材、教具の整備を計画的に行えた。指導資料を体育館に掲示して授業に生かせるように工夫した。	B	
	テクニカルアドバイザーの活用を考慮した年間指導計画を作成し、それに沿って連携した指導を行う。	年間指導計画に基づく授業を実施し、効果的にテクニカルアドバイザーを活用できた。	A	
③	東京都体力テストの生活・運動習慣等調査において、肯定的な評価が東京都平均を上回る。	「朝食を毎日食べている」が93.1%に比べ、「睡眠時間が8時間以上」は65.4%であった。	C	・「睡眠時間は十分である。」と88%の児童が回答しているが、実質の睡眠時間は短い。また、8割の児童が「運動やスポーツをもっとしたい。」と意欲的であるが、実際に運動ができていない児童は半数である。学習以外でタブレットやスマートフォン、テレビ等を見ている時間も高学年になるほど増えている。学習した知識や意識を実践につなげていく必要があり、家庭とも連携していく。
	食育の充実を図り、様々な教育活動において学習を展開する。	グリンピースのさやむきやとうもろこしの皮むきなど、給食食材を生かした学習を、栄養士が中心となって展開した。調理室の様子を動画で紹介し、子どもたちの食への関心を高めた。	A	
	健康教育や健康指導を発達段階に応じて行い、児童に健康について関心をもたせるとともに、家庭にも啓発する。	規則正しい生活の大切さについて、様々な場面で指導を行った。高学年は学校薬剤師の協力を得て、薬育の学習を行った。保健だより等を活用し、家庭への啓発を行った。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		・いじめは、いつでもどこでも起こりうるものであるという前提に立って指導することを全教員が認識する。 (いじめの認識) ・スクールカウンセラーや外部機関と連携しながら、全教職員が、情報を共有する。(関係機関との連携) ・毎週木曜日に生活指導夕会やいじめ対策委員会などを行い、組織的な学校体制を強化する。(組織的対応) ・各教科や市民科での授業を中心に、日常生活や学校行事、縦割班活動、地域交流など、あらゆる場面で人権尊重教育を推進する。(人権教育の充実) ・品川区教育委員会の施策を適切に実施し、いじめ未然防止授業を行ったり、子どもからのSOSをキャッチしたりする。(いじめの未然防止)		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	学校風土調査の合計偏差値が50を超える。	合計偏差値は55.9だった。学校における「積極的なかわり」はよい状況である。	A	・区の施策である「いじめ未然防止」のための日々の児童観察や実態調査等のデータを確実に把握・対応し、未然防止・早期発見に努める。 ・年3回実施した「いじめ防止の授業」の指導方法や効果の検証を確実にに行い、次年度に生かす。 ・外部機関との連携を継続し、多くの目で児童を見守る。
	未然防止のために、いじめ防止授業を各学年が年3回行い、いじめ防止の指導に取り組む。	全教員が研修を通して、その教育的意義を学び、3回の授業を実施した。児童から学んだ内容の発言が聞かれるようになってきた。	A	
	いじめDアンケート(毎月)やデイケン(毎日)などの調査から小さな問題点を見逃さず、児童が安心して通える環境を作る。	生活指導主幹を中心に、定期的に確実なアンケート実施ができた。引き続き、些細なことでもいじめとしての認知ができるよう教員の意識を高めていく。	A	
	必要に応じて、区巡回相談員やスクールカウンセラー、HEARTS(学校支援チーム)と連携し、児童への聞き取りや支援を行う。	いじめ対応以外の事案も含め、外部機関との連携は十分に取れている。	A	
②	人権に関する知識や態度を身に付け、生命尊重や正義に関する「i-Check」での肯定的な評価を80%以上とする。	生命尊重や正義に関する肯定的な評価は80%を超えた。	A	・あらゆる場面・機会を通して日常的に人権感覚を育てるとともに、人権週間では、校長講話や校内掲示等、意図的に子どもたちに働きかけて、人権意識を高める。
	人権全体計画に基づき、各教科や市民科、行事等を通して児童の人権感覚を育成する。また、人権週間を中心に、人権標語(全学年)や人権ポスター(5年生)の作成および掲示を通して、意識化を図る。	人権標語・ポスターの作成や掲示、校長講話、学級指導、副籍交流など、様々な学習を展開できた。5年生は、食肉市場職員による授業を行い、差別について学ぶ機会を得られた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 ウェルビーイング教育の推進および自己肯定感の向上（特色ある教育活動に関すること）

重点目標		・褒めて伸ばす教育理念のもと、児童一人一人の個性を大切にする。（個性の尊重） ・自分に必要なウェルビーイングを知り、友達と共有する。（自己開示・協働活動） ・集団の中での自己存在を意識させ、家族・友達・先生からの支えに気付かせる。（他者との関わり） ・あらゆる教育活動において、児童全員に活躍の場を設定し、成功体験を味わわせる。（体験活動の充実） ・委員会活動や異学年交流、地域活動を通して「自分は必要である」という意識を高める。（自己有用感の育成）		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	児童の自己肯定感に関し、「i-Check」での肯定的な評価が全国値を上回るようにする。	全ての学年において、全国値を上回ることができた。	A	・ウェルビーイング特別教育推進校として、研修会や研究会を行うことで、教員も児童もウェルビーイング教育について多くのことを学ぶことができた。 ・次年度は、ウェルビーイング推進校として今年度も研究を踏まえた取組を行っていく。
	学習において、学び合い活動を工夫して展開し、児童の相互評価を通して自他の良さに気付かせる。	様々な教科・領域において、学び合い活動が展開された。友達の良さを認める雰囲気があり、相互評価が自己を見つめるために有効であった。	A	
	行事等を通して、児童一人一人の活躍の場を工夫し、より多くの成功体験を積ませる。	スポーツフェスティバルや学芸会を通して、成功体験を積ませることができた。保護者からの感想も好評であった。	A	
	縦割り班活動を計画的に行い、特に上級生に対し、下級生との関係性を価値付ける。	なかよし班の活動では、高学年が中心となって、異学年交流の楽しさを味わうことができた。高学年の意識が高まった。	A	
	保護者と連携して児童の自己肯定感を育成するために、学校の方針や取組を様々な機会を通して保護者に知らせ、啓発する。	保護者会や学校だより、学校HPを活用し、教育方針を保護者に伝えてきた。今年度は、ウェルビーイング教育についての啓発も行った。	A	
②	学習活動を通して、自分に必要なウェルビーイングを8割以上の児童が見付けられる。	「成功体験と自信」「充実感と向上心」が8割を上回っていることから分かる。	A	・ウェルビーイング特別教育推進校としての取組が児童の自己肯定感や自尊感情を高めることにつながった。 ・次年度は、ウェルビーイング推進校として今年度も研究を踏まえた取組を行っていく。
	教職員が研修を通して、ウェルビーイング教育を正しく理解し、特別推進校として年間指導計画や学習指導案を開発する。	講師を招へいしての研修会が効果的であった。研究主任を中心に、区に先駆けて、アレンジ型授業の学習指導案を開発できた。	A	
	校内研究(国語科)と連携し、「誰一人取り残さない」学習の展開や支援方法を開発する。	ウェルビーイング教育とタイアップし、子どもたちの実態や課題に適した指導法を学び合うことができた。	A	
	教員がウェルビーイングでいられるよう、ゆとりある教育活動や働き方改革を推進する。	教員が元気であることが、子どもにとって有意義な教育活動が展開できるという考えに立ち、働き方改革を進めてきた。教員の退勤時間が昨年度より早くなってきた。	A	

A＝十分達成できた B＝おおむね達成できた C＝未達成